

「イスラム主義」

2015年12月16日

岩波の月刊誌『世界』の1月号に、パリ・ディドロ大学の精神病理学教授のフェティ・ベンスラマ氏の「絶望している者にとって過激イスラム主義が一種の興奮剤である」と題したインタビューが掲載されている。フランスで、過激化した者の3分の2が15歳から25歳までの間の若者で、4分の1が未成年である。彼らは大人になるための猶予期間、思春期に閉じ込められ、自己のアイデンティティを根底から見直さねばならない苦悩の時にいるとし、下記のように語っている。「ジハーディスト志願への誘いは、自己のアイデンティティに深刻な亀裂を生じさせている若者の心をとらえます。亀裂を埋めてくれるし、自我の回復を可能せしめ、場合によっては新たな自己形成、ということは迷いなどと無縁な信仰という補綴物、完全なる理想を提供してくれるのです。」「過激化することで、頼りないアイデンティティに強固な鎧が与えられます。受容と供給が合致すれば、亀裂は埋まり覆いが被さる。当人にとっては不安の鎮静化であり、解放された気分、絶大な力がほとばしります。べつ人間になるのです。」「アイデンティティ問題を抱えている場合、当人は無価値である、欠陥商品、ゴミだと思う。イスラム主義は、当人が鏡を見ているかのように、『お前は信心も道義もないからどうしようもないが、大義のために伝道者となれば許される可能性はある。“超イスラム”になれ』と告げます。ジハーディストへの誘いは、問題解決の糸口、つまり栄光への脱出という気高い逃げ道を教えます。“ゴミ”は手ごわい人間になるでしょう。」「殉教者というのは消えることで生き延びたいと思っている人間です。志願者にとっては、それは自殺ではなく自己犠牲であり、その行為は絶対理想を通しての不死への移行なのです。」

ベンスラマ氏のインタビューを長々と引用したが、イスラム過激派に走る若者たちをよく理解できるのではないか。誰もが青春に、アイデンティティを確立するために同じような苦悩を経験してきた。このジハーディストたちへの武力攻撃によっては何の解決も生み出さない。むしろ逆に、彼らに正当性を与え、勢いづかせるだけである。

ベンスラマ氏は下記の点を指摘している。イスラム帝国は1924年に歴史を閉じた。オスマン帝国の領土が分断され、植民地主義列強によって占領された結果、ムスリム国は自領土において主人の立場から被植民国となった。1400年間に及ぶ基盤が崩壊し、統一性と強大さの幻想が終わり、イスラム教の消滅という固定観念が定着した。この歴史的断絶の結果として1924年に「モスリム同胞団」が誕生し、“傷ついたイスラム教の理想”の報復を原理と呼べるものに具体化した組織になっていった。彼らはイスラム帝国の再興を誓い、その反動的スタンスは変幻自在の形で、直観主義、純粹主義、政治主義、好戦主義などの形を取った。トラウマの記憶を伝え、それを現在の欧米諸国の軍隊の派遣や市民戦争で苦しむ民衆の惨憺たるニュースに投影させている。この問題こそが、イスラム問題の根底にあり、これも武力によっては解決できないことである。更に、ムスリムの間でも、お互いに猜疑があり、西欧との関係を巡って、疑心暗鬼の争いがある。

現在、イスラム排斥と不寛容の嵐が吹き荒れている。米国では、共和党の大統領候補のドナルド・トランプ氏はイスラム教徒を米国に入れるなど叫んで人気を博している。フランスでは反移民を訴える極右政党が躍進している。政治家たちは二言目には「国際協調」と言うが、国際とは、同じ価値観を共有する国だけではなく、違う価値観を持つ地上の全ての国々を含んでいるはずである。排外主義と不寛容は憎しみと争いを終わらせることはできない。多様性を受容し合うところで、互いに人間になり、平和が約束される。